



共感性が公共場面における迷惑行為に与える影響

谷, 芳恵

(Citation)

神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 2(1):7-12

(Issue Date)

2008-09

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81000803>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81000803>



共感性が公共場面における迷惑行為に与える影響 The Effects of Empathy on Annoyance in Public Space

谷 芳 恵*
Yoshie TANI*

要約：公共場面における迷惑行為の原因の一つに、他者への思いやり、即ち共感性の欠如があると考えられている。本研究では、共感性の、他者の心に気づくという認知的側面（気持ちの想像）と、他者の気持ちを自分のものとして感じ取る情動的側面（共感的関心）に注目し、これらが公共場面での迷惑行為に与える影響について検討することを目的とした。また、共感の基準となる他者の感じる迷惑の程度（他者の迷惑感）、身近な他者の在・不在（状況）との交互作用についても検討した。大学生・大学院生342名（男性145名、女性197名）を対象に質問紙調査を実施し、迷惑行為の頻度を従属変数、状況、共感性、他者の迷惑感を独立変数とする階層的重回帰分析を男女別に行った。その結果、男性では他者の迷惑感の主効果が、女性では状況、他者の迷惑感の主効果が認められた。共感性については、主効果、交互作用とも認められなかった。以上の結果について、共感性の性質と公共場面の特徴に注目し、考察を行った。

キーワード：社会的迷惑行為、共感性、他者の迷惑感、身近な他者の在・不在

1. 問題と目的

私たちは、日頃さまざまな迷惑行為を経験する。電車に乗れば車内で大騒ぎする中高生にイライラし、映画館では携帯電話の着信音に不快を感じる。斎藤（1999）は、このような「行為者が自己の欲求充足を第一に考えることによって、結果として他者に不快な感情を生起させること、またはその行為」を社会的迷惑行為と呼ぶ。人々の公共場面でのマナーの悪さに対する関心は高まっているといえ、心理学的研究においても、近年これらの迷惑行為に関する研究が頻繁に行われるようになってきている（斎藤, 1999; 吉田・安藤・元吉・藤田・廣岡・斎藤・森・石田・北折, 1999）。

他者の迷惑への気づきと思いやり まず、社会的迷惑行為が起る原因の一つとして、他者に迷惑をかけているという意識の希薄さが考えられる。例えば、ある行為に対して自分が迷惑を感じていないなら、他者も迷惑に感じていないだろうと考えるかもしれない。その行為が周囲の人々に迷惑をもたらしているという認識がなければ、その行為を抑制することはできないだろう。反対に、他者が迷惑に感じていることに気づきさえすれば、迷惑行為は抑制されと考えられる。これについては、青年の規範意識研究において、他者に直接迷惑をかけないことが青年の善悪判断の基準として重要な位置を占めていることが示されていることからもうかがえる（谷, 2006a; 友枝・木村, 2003）。即ち青年は、他者に迷惑をかけること

はしてはいけないという認識を持っているといえる。

その一方で、大学生の授業中の反規範的な行為（私語など）について検討した小牧・岩淵（1997）は、これらの行為の背後に「してはいけない」とわかっていても「ついでしてしまう」という態度があることを明らかにしている。これは、他者に迷惑をかけているという認識が実際に迷惑行為を抑制するとは必ずしもいえないということを示唆している。

では、なぜ他者が迷惑するだろうという気づきが実際の行為には結びつかないのだろうか。これには、善悪の判断とは別の要因が関わっていることが予想される。その一つが、他者が迷惑していても自分には関係がないという、自己中心的な考えである。

迷惑行為に対する共感性の影響 公共場面での、まさに傍若無人といえる迷惑行為が起るのは、他人への気配り、相手へのいたわり、思いやりの心が欠けているためであるという見方は、広く受け入れられたものであるといえる（例えば、薩日内, 2001）。このような他者への思いやりの心に関する個人特性に、共感性がある。共感性は、向社会的行動を動機づけ、媒介する重要な内的変数である（Eisenberg & Mussen, 1989 菊池・二宮訳, 1991; 浜崎, 1985）。そのため、これまで共感性と向社会性、援助行動などとの関連について検討した研究は多くみられる（藤吉・田中, 2006; 桜井, 1986, 1988; 登張, 2000; 高木, 1976; 浜崎, 1985 など）。また共感性は、

* 神戸大学大学院総合人間科学研究科博士後期課程

(2008年4月1日 受付)
(2008年9月1日 受理)

認知的要素と感情的要素からなる多次元的概念であるとする見方から、これまで多くの多次元尺度が作成されている (Davis, 1980; 加藤・高木, 1980; 澤田・齊藤, 1995, 1996; 登張, 2003 など)。これら多次元共感性尺度の多くは、「共感的関心」「個人的苦痛」「視点取得」「ファンタジー」の4つの因子から構成されている。登張(2000)は、多次元の視点に立った共感性研究を概観し、これらの下位因子がどのような変数と関連するのかを検討している。これによると、下位因子ごとに関連する変数は異なり、共感的関心、視点取得は向社会性と有意な正の相関関係にあることを示している。本研究では、共感性のうち、特に他者志向的な共感性因子である共感的関心と視点取得について、迷惑行為との関連を検討する。

石田・吉田・藤田・廣岡・斎藤・森・安藤・北折・元吉(2000)は、共感性や役割取得の高い人ほど、自分を含めた他者、社会全体にとって、その行為がどういう意味をもつかを考える視点を取りやすくと予想している。共感性の高い人は、他者の立場に立って他者の心を認知し、他者に共感的に関わり、他者の心を慮り、他者の苦痛を取り除こうとする傾向をもつことから、他者の迷惑感に目を向けやすく、その行為に他者が迷惑を感じていることに気づくことで行為が抑制されると考えられるのである。迷惑行為と共感性の関連を検討した研究には、小池・吉田(2005)、戸田(2006)などがある。友人や知人との間で生じる対人的迷惑行為を検討した小池・吉田(2005)では、行為によってばらつきがあるものの、友人との間で生じる迷惑行為は共感性と負の相関にあることを示している。一方、公共場面における社会的迷惑行為の生起と共感性との関連を検討した戸田(2006)では、社会的迷惑行為と共感性には有意な相関はみられていない。このように、迷惑行為に共感性が及ぼす影響については、一貫した結果は得られていない。戸田(2006)において共感性による影響がみられなかった原因の一つとして、小池・吉田では友人という身近な他者との間で生じる迷惑行為を想定したのに対し、戸田(2006)では他者との関係性の影響が考慮されていなかったことが考えられる。公共場面における人間関係は非常に複雑に入り組んでおり、一概に捉えることは困難である。しかし、その場面で生じる行為の生起・抑制を決定する上で、周囲の他者との関係は重要な役割を果たすと推測される。このことから、次に、公共場面の持つ特殊性についてみていくことにする。

公共場面の持つ特殊性 公共場面とは、見知らぬ人と空間を共有する、ある種不思議な場面である。このような状況こそが、迷惑行為を引き起こす、という指摘がある。一口に公共場面といっても、その形態はいつも同一のものであるとは限らない。家族や友人などの身近な他者と一緒にいる場合や、見知らぬ人ばかりの中に一人にいる場合など、その形態はさまざまである。吉田他(1999)は、社会的迷惑行為が増加した社会的背景に、共同体社会の崩壊と生活空間の拡大による相互監視システムの機能不全があるとしている。かつての社会は、周りの人々の多くが顔見知りであった。このような社会においては、世間に準拠して恥ずかしい行為をとることが社会規範の基本であり(井上, 1977)、他者の存在は迷惑行為を抑制してきたと考えられる。しかし、現在の社会においては、見知らぬ他者と接触する機会は著しく増加し、日常的に一人も身近な他者が周囲に存在しない状況を経験することになる。公共場面で遭遇する多くの見知らぬ他者は、その後深く関わることはない。そのため、

生活領域全般での評価者にはなにくく、社会的迷惑行為を抑制する眼として作用していないことが考えられる。特に青年は、自分の身近にいる同質的な他者に限定してその思惑や関係性に気を配る傾向が極めて顕著であることが指摘されている(高田・松本, 1995)。つまり、周囲に身近な他者がいないということは、配慮すべき、言い換えると共感すべき他者がいないということであり、その人自身の共感性の高さに関わりなく迷惑行為が抑制されなくなると考えられる。

また浜崎(1985)は、幼児のチップ分与行動をとりあげ、他者存在による共感性の作用の違いを検討している。これによると、共感性が低い幼児では、周囲に他者が存在する場合に、他者が存在しない場合に比べ、チップの分与数が有意に多くなることが示されている。また、小池・吉田(2005)においても、情動的共感性の高い人は相手によって迷惑行為の生起頻度が異なることが指摘されている。このように、公共場面における迷惑行為に対する共感性の影響は、周囲の他者の存在やその関係性によって左右されると考えられる。

目的 以上のことから本研究では、状況の違いを考慮しつつ、共感性が公共場面における迷惑行為に影響を与えるのかどうかについて検討する。共感性、他者の迷惑への気づき(他者の迷惑感)、身近な他者の在・不在(状況)の各要因の主効果に加え、交互作用を想定することで、これら要因の直接的・間接的效果を包括的に捉えることができるだろう。

なお本研究では、特に電車の乗車場面における社会的迷惑行為をとりあげる。これは、電車が①多様な年代、性別の人々が日常的に利用する公的機関である、②街角などに比べて流動性が低く、他者と一定時間以上共有される空間である、ためである。乗車場面は、①学校や会社などとは異なり、多くの場合周囲にいる人のほとんどが見知らぬ人である、②映画館やレストランなどに比べて狭く、顔を見ることができる距離である、③一定時間その空間に閉じ込められるため、回避がしにくいといった特徴があり、行為が迷惑であると認知されやすい、言い換えると迷惑行為が生じやすい場面であると考えられる。

2. 方法

調査対象者

京阪神圏に住む大学生・大学院生を対象に無記名の質問紙調査を行った。欠損値のあるもの、普段の電車の利用頻度(ほとんど毎日/週に2、3日/月に数日/ほとんど使用しない)において電車をほとんど利用しないと答えた人等を除いた342名(18～24歳、平均年齢19.62歳、 $SD=1.51$)を分析対象とした。男性145名(18～24歳、平均年齢19.93歳、 $SD=1.59$)、女性197名(18～24歳、平均年齢19.39歳、 $SD=1.40$)である。後述するように、調査対象者には質問紙A[友人在状況]、B[友人不在状況]の2種類の質問紙が無作為に割り当てられ、質問紙Aには176名(男性73名、女性103名)、質問紙Bには166名(男性72名、女性94名)が回答した。大学の講義開始前あるいは終了後に質問紙を配布し、集団的に実施、回収が行われた。その他、知人を介して、個別に質問紙を配布、回収を行った。調査実施時期は2005年11月～2006年10月である。

Table1 社会的迷惑行為項目と、行為生起頻度・他者の迷惑感の主成分分析の結果

		行為生起 頻度	行為生起頻度		他者の 迷惑感
			友人在	友人不在	
1.	まだ降りる人がいるのに、先に乗り込もうとする	.43	.44	.41	.57
2.	かけ込み乗車をする	.29	.13	.44	.42
3.	電車内で、携帯電話をマナーモードにしない	.31	.27	.32	.55
4.	混雑した電車で、空席の前に立ったままである	.37	.40	.34	.55
5.	大きな荷物を置いて通路をふさぐ	.61	.57	.64	.70
6.	電車内で物を食べたり飲んだりする	.38	.43	.34	.47
7.	座席に荷物を置いたり、足を広げて座ったりする	.54	.59	.49	.66
8.	電車に乗ったり降りたりする人がいるのに、入り口付近にいて動かない	.59	.65	.49	.65
9.	リュックを背負ったまま満員電車に乗る	.55	.50	.60	.49
10.	電車内や駅のホームにごみを放置する	.38	.51	.25	.58
11.	電車内でヘッドホンステレオの音漏れを気にせず音楽を聞く	.49	.46	.51	.66
12.	電車内で、携帯電話で通話する	.36	.27	.47	.60
13.	乗車時に、列に並ばずに割り込む	.41	.41	.41	.62
削除項目	電車に不正乗車(無賃乗車, キセル)する	.15	.18	.11	.30
		説明率	20.32	20.78	20.46
		α	.65	.65	.66
					34.13
					.82

Table2 各変数の基礎統計量(男女別)

		M	SD	N
共感的関心	男性	3.70	.57	145
	女性	3.86	.50	197
気持ちの想像	男性	3.15	.71	145
	女性	3.31	.65	197
他者の迷惑感	男性	4.85	.60	145
	女性	4.87	.55	197
行為生起頻度				
友人不在	男性	1.77	.30	72
	女性	1.81	.33	94
友人在	男性	1.81	.36	73
	女性	1.73	.28	103

実施内容

状況の設定 周囲に身近な他者がいるかいないかという状況による違いが及ぼす影響をみるために、「社会的迷惑行為の生起頻度」の質問において、質問紙A[友人在状況]では同性友人がいる状況を、質問紙B[友人不在状況]では見知った人がいない状況を想定するよう設定した。[友人在状況]を1、[友人不在状況]を0とするダミー変数を作成し、分析に用いた。その他の質問についてはA、Bとも共通である。

社会的迷惑行為 乗車場面における14の非社会的行為（Table 1参照）を用い、迷惑行為の生起頻度と他者の迷惑感の認知についてたずねた。(1)社会的迷惑行為の生起頻度 各行為について、普段自分はこの程度の頻度でしているか回答するよう求めた。質問紙Aでは友人たちと一緒に電車に乗り込んだ場面を、質問紙Bでは一人で電車に乗り込み、周囲に知人が一人もいない場面を想定するよう求めた。回答形式は、「1：全くしたことがない」～「4：いつもする」の4段階である。(2)他者の迷惑感の認知 その場に居合わせた自分以外の人が感じている不快や迷惑の程度を推測し、回答するよう求めた。回答形式は、「1：全く感じない」～「6：とても感じる」の6段階である。

共感性 登張（2003）の多次元共感性質問紙から、共感性の感情

的側面にあたる「共感的関心」（13項目）と認知的側面にあたる「気持ちの想像」（5項目）を用いた。「共感的関心」は、他者の状況や感情体験に対して、自分も同じように感じ、他者志向のあたたかい気持ちをもつ傾向を測定する。「気持ちの想像」は他者の気持ちや状況を想像する傾向を測定する。回答形式は、「1：全くあてはまらない」～「5：非常にあてはまる」の5段階である。

3. 結果と考察

各変数の得点の算出

社会的迷惑行為 社会的迷惑行為の生起頻度（状況別）、他者の迷惑感の認知について、それぞれ主成分分析を行った。14項目のうち、いずれにおいても因子負荷量が低かった不正乗車に関する1項目を削除した（Table 1）。残りの13項目を採用し、固有値の落ち込みから1因子とするのが適当であると判断された。これらの項目について、内的整合性を検討するために、Cronbackの α 係数を求めた。その結果、社会的迷惑行為の生起頻度は、友人不在状況で $\alpha = .66$ 、友人在状況で $\alpha = .65$ とやや低かったが、分析には十分耐えうると判断された。これらの項目平均値を算出し、これを各状況の「行為生起頻度」得点とした。また、他者の迷惑感の認知は $\alpha = .82$ と十分な値を示し、これらの項目平均値を「他者の迷惑感」得点とした。「行為生起頻度」得点が高いほど普段迷惑行為をする頻度が高く、「他者の迷惑感」得点が高いほど他者が感じている迷惑の程度を高く認知しているといえる。

共感性 「共感的関心」と「気持ちの想像」それぞれについて、項目平均値を求め、各得点とした。Cronbackの α 係数は、「共感的関心」で $\alpha = .87$ 、「気持ちの想像」で $\alpha = .74$ であり、内的整合性は十分であった。「共感的関心」得点が高いほど他者の情動体験、気持ちに対して他者志向的な関心を寄せる傾向が高く、「気持ちの想像」が高いほど他者の立場から物事をみる傾向が高いといえる。「行為生起頻度」、「他者の迷惑感」、「共感的関心」、「気持ちの想像」の各得点の男女別にみた平均値、標準偏差は、Table2に示した。

階層的重回帰分析の結果

他者の迷惑感と社会的迷惑行為の生起頻度の関連、状況、公的

自意識、私的自意識による効果を検討するために、Cohen, Cohen, West, & Aiken (2003) に従い、階層的重回帰分析を行なった。これは、独立変数を段階的に投入し、そのステップにおける決定係数 R^2 の変化量 ΔR^2 に対する F 値が有意である場合に、投入項は有意であると判断するものである。今回は、男女別にそれぞれ分析を行うため、全 1 次変数を男女別に平均値 0、標準偏差 1 に標準化した。

分析は、従属変数を「行為生起頻度」とし、独立変数は「状況」「共感的関心」「気持ちの想像」「他者の迷惑感」及びこれらの交互作用項とする階層的重回帰分析（強制投入法）を行なった。交互作用項には、各変数の標準化された値の積を求めて使用した。

まず、第 1 ステップとして、外的変数である「状況」を投入した。第 2 ステップでは、状況による影響を統制した上で、内的変数である「共感的関心」「気持ちの想像」「他者の迷惑感」を投入した。さらに第 3 ステップでは、「状況」「共感的関心」「気持ちの想像」「他者の迷惑感」の 1 次交互作用項を、第 4 ステップでは 2 次交互作用項を、第 5 ステップでは 3 次交互作用項を段階的に投入した。以上の各ステップにおいて、決定係数 R^2 の変化量 ΔR^2 に対する F 値が有意である場合に、投入項は有意であると判断された。

まず、男性について階層的重回帰分析を行った。その結果を Table 3 に示した。第 2 ステップにおいてのみ、 R^2 の有意な変化がみられ ($\Delta R^2=.06$, $F(3,140)=3.19$, $p<.05$)、「他者の迷惑感」で負の有意な効果が示された ($\beta =-.24$, $p<.01$)。その他のステップでは有意な R^2 の変化はみられず、「状況」「共感的関心」「気持ちの想像」では有意な主効果、交互作用も認められなかった。このことから男性では、他者の迷惑感の認知が高いほど迷惑行為は抑制されると考えられる。共感性の高さと身近な他者の在・不在といった状況による違いは、迷惑行為の生起・抑制に影響するとはいえないという結果であった。

次に、女性について階層的重回帰分析を行った (Table 4)。その結果、第 2 ステップで R^2 の変化量が有意であり ($\Delta R^2=.04$, $F(3,192)=2.85$, $p<.05$)、「状況」($\beta =-.15$, $p<.05$) と「他者の迷惑感」($\beta =-.16$, $p<.05$) はそれぞれ負の有意な効果を示した。他のステップでは、 R^2 の有意な変化はみられず、「共感的関心」「気持ちの想像」では有意な主効果、交互作用は認められなかった。このことから、女性においても他者の迷惑感の認知が高いほど迷惑行為は抑制されるが、共感性の高さは迷惑行為に影響するとはいえない。また、身近な他者の在・不在によっても迷惑行為の生起頻度は異なり、周囲に身近な他者がいない場合、身近な他者がいる時よりも迷惑行為の頻度が高くなるといえる。

共感性が迷惑行為に与える影響 以上の結果は、共感性は公共場面における迷惑行為の生起に影響を与えないことを示している。これは、公共場面で生じる迷惑行為は共感性（他者への思いやり）の欠如からくるとする一般的見解を支持するものではない。迷惑行為と共感性、社会的スキルの関連を検討した戸田（2006）においても、共感的関心と迷惑行為との間に弱い負の相関がみられるにとどまっており、迷惑行為は共感性や社会的スキルとは別の個人特性や状況の影響を強く受けるという推測が示されている。本研究の結果は、この戸田（2006）の推測を裏付ける結果であるといえるだろう。

一方、小池（2004）、小池・吉田（2005）は、友人との間で起こる対人的迷惑行為について検討し、共感性が高い人は相手の迷惑感に敏感に反応して行為を決定するとしている。これは、共感性と他者の迷惑感の認知には交互作用があることを示唆している。しかし、本研究では有意な交互作用は認められず、共感性の高低によって、他者の迷惑への気づきが迷惑行為を抑制する効果に違いがあるとはいえなかった。本研究で小池（2004）らが指摘したような結果が得

Table 3 迷惑行為生起頻度を従属変数とする階層的重回帰分析の結果(男性)

	1	2	3	4	5
状況	.05	.05	.05	.02	.03
共感的関心		.12	.16	.16	.18
気持ちの想像		-.09	-.23	-.24 [†]	-.23
他者の迷惑感		-.24 ^{**}	-.24 [†]	-.27 [†]	-.26 [†]
状況 * 共感的関心			-.09	-.10	-.12
状況 * 気持ちの想像			.15	.14	.13
状況 * 他者の迷惑感			.03	.04	.03
共感的関心 * 気持ちの想像			-.01	-.06	-.06
共感的関心 * 他者の迷惑感			.16 [†]	.08	.10
気持ちの想像 * 他者の迷惑感			.00	.05	.01
状況 * 共感的関心 * 気持ちの想像				.03	.02
状況 * 共感的関心 * 他者の迷惑感				.09	.06
状況 * 気持ちの想像 * 他者の迷惑感				-.04	-.01
共感的関心 * 気持ちの想像 * 他者の迷惑感				.08	-.02
状況 * 共感的関心 * 気持ちの想像 * 他者の迷惑感					.11
R^2	.00	.07	.10	.11	.11
ΔR^2	.00	.06	.03	.01	.00
F	.40	3.19 [*]	.84	.32	.15

^{**}p<.01 ^{*}p<.05 [†]p<.10

られなかった原因として、第一に公共場面における迷惑行為と対人的迷惑行為の違いがあげられる。小池（2004）らが検討した対人的迷惑行為は、借金、時間を気にせず電話をかけるといった受け手がある迷惑行為である。一方、本研究で用いた公共場面における迷惑行為は、特定の受け手が存在しない行為であるといえる。このような行為の性質の違いが、共感性による影響の違いを生じさせたと考えられる。

第二の原因として、共感性の特性による影響があげられる。澤田（1992）は、日本社会では、家族、友人などの「ウチ」の人間に対しては共感することができるが、見知らぬ他者である「ソト」の人間に対しては共感することが困難であるとしている。本研究では、身近な他者ではなく広い一般的他者の迷惑感の認知による効果を検討しており、そのために共感性が作用しにくかったことが考えられる。また谷（2006b）では、他者との関係性によって迷惑の認知に差があることが示されており、一般的他者から期待される行為と身近な他者から期待される行為は異なることが推測される。身近な他者がいる場面では、身近な他者の期待する行為にあわせた行動が求められるだろう。今後、それぞれの場面で期待されるだろう行為の違い、特に他者の迷惑感の認知と身近な他者からの期待との違いを考慮することが必要だろう。

また、本研究では公共場面という場の特殊性に注目し、身近な他者という評価者が周囲に存在するときに共感性は迷惑行為を抑制すると推測し、検討を行った。しかし、状況と共感性に有意な交互作用はみられず、身近な他者の在・不在によって共感性の影響に違いがあるとはいえなかった。身近な他者の在・不在は直接迷惑行為に影響を与えていることが示されたが、次にこの結果について考察していく。

身近な他者の存在が迷惑行為に与える影響 身近な他者の在・不在による影響については、女性でのみ有意な結果が得られ、周囲に

身近な他者がいることで迷惑行為が抑制されると考えられた。この結果は、公共場面で迷惑行為が生じるのは身近な他者による監視の目がないことによるとする吉田他（1999）の指摘を一部支持するものである。

では、なぜ身近な他者の在・不在は女性でのみ迷惑行為に影響し、男性ではそのような影響がみられなかったのだろうか。その原因として、男性と女性の志向性の違いがあると考えられる。発達心理学や人格心理学では、男性が「個の確立」を重視するのに対し、女性は「関係性の維持」を重視するという、方向性の違いがあることが指摘されている。例えば Gilligan（1982）は、男性と女性の道徳性は質的に異なっており、男性の道徳性が分離志向の強い「正義の道徳」であるのに対し、女性の道徳性は関係性志向の強い「配慮と責任の道徳」であるとしている。また伊藤（1993, 1998）は、男性は個人志向性優位であり、女性は社会志向性優位であるとしている。つまり、女性が身近な他者との関係を良好に保つために、今回とりあげた一般に迷惑であるとされる行為を抑制するのに対し、男性は他者との関係の維持よりも自らの判断によって行為を決定するために、このような違いがみられたと考えられる。

また、本研究では友人の在・不在を状況要因としてとりあげた。しかし、親しい友人と顔見知り程度の知人とは、その存在による影響に違いがあることが考えられる。例えば井上（1977）は、世間体は家族や親しい友人よりも顔見知りとの間で真に問題になるとしている。顔見知りとの間では一つの行為が全体的な評価に繋がりがやすいが、親しい間柄ではよりその人についての評価基準をもっているため、互いに寛容になりやすいことが考えられる。そのため、親しい友人や家族がいる場合よりも、顔見知りがいる場合の方が、迷惑行為をより抑制するかもしれない。今後、このような関係性の深さといった要因について、さらに検討することが必要である。

他者の迷惑感への気づきが迷惑行為に与える影響 今回の結果が

Table4 迷惑行為生起頻度を従属変数とする階層的重回帰分析の結果(女性)

	1	2	3	4	5
状況	-.14 *	-.15 *	-.15 *	-.13 †	-.13 †
共感的関心		-.07	-.18	-.19 †	-.19
気持ちの想像		-.06	-.03	-.04	-.04
他者の迷惑感		-.16 *	-.15	-.12	-.11
状況 * 他者の迷惑感			-.03	-.04	-.04
状況 * 共感的関心			.13	.13	.13
状況 * 気持ちの想像			-.03	-.03	-.03
共感的関心 * 気持ちの想像			-.07	.07	.07
共感的関心 * 他者の迷惑感			-.06	-.18	-.19
気持ちの想像 * 他者の迷惑感			-.07	-.10	-.10
状況 * 共感的関心 * 気持ちの想像				-.14	-.15
状況 * 共感的関心 * 他者の迷惑感				.13	.14
状況 * 気持ちの想像 * 他者の迷惑感				.03	.03
共感的関心 * 気持ちの想像 * 他者の迷惑感				-.02	-.03
状況 * 共感的関心 * 気持ちの想像 * 他者の迷惑感					.02
R ²	.02	.06	.09	.10	.10
ΔR ²	.02	.04	.03	.01	.00
F	4.01 *	2.85 *	.90	.69	.01

*p<.05 †p<.10

ら、状況や共感性の高低とは関わりなく、他者が迷惑していると気づくことで、迷惑行為は抑制されることが考えられる。即ち、公共場面における迷惑行為が生じるのは、他者が迷惑していること自体に行者が気づいていないこと、あるいは迷惑を低く見積もっていることが原因の一つであるといえる。このことから、公共場面での迷惑行為の抑制には、他者の迷惑への気づきを喚起することが必要であるといえる。

またこの結果は、「してはいけないけれどしてしまう」という小牧・岩淵 (1997) の指摘とは一致しないようにみえる。しかし、今回の結果でみられた他者の迷惑感の影響は弱いものであり、説明率も十分とはいえない。共感性との交互作用はみられなかったものの、何らかの要因が他者の迷惑感と迷惑行為の生起との関連に影響を及ぼしていることが考えられる。例えば出口 (2004)、谷 (2007) は、公的自意識と私的自意識が他者の迷惑感の認知と迷惑行為の関連に影響を及ぼすことを示している。今後更なる迷惑行為の生起・抑制に関わる要因についての研究の蓄積が必要であろう。

5. 引用文献

- Cohen, J., Cohen, P., West, S. G., & Aiken, L. S. (2003). *Applied multiple regression/ correlation analysis for the behavioral sciences* (3rd Ed.). Hillsdale, N. J.: Lawrence Erlbaum Associates.
- Davis, M. H. (1983). Measuring individual differences in empathy: Evidence for a multidimensional approach. *Journal of Personality and Social Psychology*, **44**, 113-126.
- 出口拓彦 (2004). 社会的迷惑行為に対する認知と頻度の関連—公的・私的自意識及び社会・個人志向性に着目して— 藤女子大学紀要, **42**, 59-64.
- Eisenberg, N. & Mussen, P. H. (1989). *The Roots of Prosocial Behavior in Children*. Cambridge: Cambridge University Press. (菊池章夫・二宮克美 (訳) (1991). 思いやり行動の発達心理 金子書房)
- Gilligan, C. (1982). *In a Different Voice: Psychological Theory and Women's development*. Harvard University Press. (ギリガン, C. 生田久美子・並木美智子 (共訳) (1986). もうひとつの声: 男女の道德観のちがいと女性のアイデンティティ 川島書店)
- 浜崎隆司 (1985). 幼児の向社会的行動におよぼす共感性と他者存在の効果 心理学研究, **56**, 103-106.
- 藤吉貴子・田中奈緒子 (2006). 青年と成人における共感性と罪悪感の差異 昭和女子大学生活心理研究所紀要, **9**, 99-105.
- 井上忠司 (1977). 「世間体」の構造—社会心理史への試み 日本放送出版協会
- 石田靖彦・吉田俊和・藤田達雄・廣岡秀一・斎藤和志・森久美子・安藤直樹・北折充隆・元吉忠寛 (2000). 社会的迷惑に関する研究 (2) —迷惑認知の根拠に関する分析— 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (心理発達科学), **47**, 25-33.
- 伊藤美奈子 (1993). 個人志向性・社会志向性に関する発達の研究 教育心理学研究, **41**, 293-301.
- 伊藤美奈子 (1998). 人間の発達をとらえる際の2志向性概念の提唱 心理学評論, **41**, 15-29.
- 加藤隆勝・高木秀明 (1980). 青年期における情動的共感性の特質 筑波大学心理学研究, **2**, 33-42.
- 小池はるか (2004). 共感性と対人的迷惑行為との関連—迷惑高認知場面と迷惑低認知場面の比較— 名古屋大学大学院発達科学研究紀要 (心理発達科学), **51**, 233-240.
- 小池はるか・吉田俊和 (2005). 対人的迷惑行為実行頻度と共感性との関連—受け手との関係性についての検討— 東海心理学研究, **1**, 3-12.
- 小牧一裕・岩淵千明 (1997). 授業規範: 反規範行為における意識構造 日本心理学会第61回大会発表論文集, 381.
- 斎藤和志 (1999). 社会的迷惑行為と社会を考慮すること 愛知淑徳大学論集, **24**, 67-77.
- 桜井茂男 (1986). 児童における共感と向社会的行動の関係 教育心理学研究, **34**, 342-346.
- 桜井茂男 (1988). 大学生における共感と援助行動の関係—多次元共感測定尺度を用いて— 奈良教育大学紀要, **37**, 149-154.
- 薩日内信一 (2001). 個性を生かすマナー・殺すマナー (特集 マナーを知らない子・教えない親) 児童心理, **756**, 1218-1222.
- 澤田瑞也 (1992). 共感の心理学—そのメカニズムと発達— 世界思想社
- 澤田瑞也・齊藤誠一 (1995). 共感性の多次元尺度作成の試み 日本教育心理学会第37回総会発表論文集, 71.
- 澤田瑞也・齊藤誠一 (1996). 共感性の多次元尺度作成の試み (2) 日本教育心理学会第38回総会発表論文集, 68.
- 高木秀明 (1976). 情動的共感性と援助行動の関係に関する研究 日本教育心理学会第18回総会発表論文集, 448-449.
- 高田利武・松本芳之 (1995). 日本の自己の構造—下位様態と世代差— 心理学研究, **66**, 213-218.
- 高田利武・矢守克也 (1998). 高校生の乗車行動と文化的自己観 青年心理学研究, **10**, 19-34.
- 谷 芳恵 (2006a). 青年の規範意識と問題行動について 神戸大学発達・臨床心理学研究, **5**, 71-80.
- 谷 芳恵 (2006b). 乗車場面における非社会的行動—青年の迷惑感の認知を中心に— 神戸大学発達科学部研究紀要, **14**, 141-147.
- 谷 芳恵 (2007). 乗車場面における迷惑行為と他者の迷惑認知の関連: 公・私的自意識及び状況による調整効果を中心に 日本教育心理学会第49回総会発表論文集, 454.
- 登張真穂 (2000). 多次元的視点に基づく共感性研究の展望 性格心理学研究, **9**, 36-51.
- 登張真穂 (2003). 青年期の共感性の発達: 多次元的視点による検討 発達心理学研究, **14**, 136-148.
- 戸田まり (2006). 社会的迷惑行動と共感性・社会的スキルとの関連 日本教育心理学会第48回総会発表論文集, 584.
- 友枝敏雄・木村好美 (2003). 規範の崩壊か、それとも変容か—高校生・高校教師の規範意識調査の計量分析 教育と医学, **51**, 443-449.
- 吉田俊和・安藤直樹・元吉忠寛・藤田達雄・廣岡秀一・斎藤和志・森久美子・石田靖彦・北折充隆 (1999). 社会的迷惑に関する研究 (1) 名古屋大学教育学部紀要 (心理学), **46**, 53-73.